

## 「南京大虐殺への道」を訪ねて

飛田 雄一

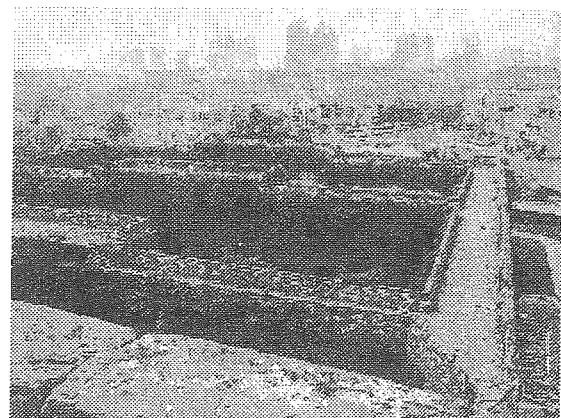
今年も南京をたずねた。神戸・南京をむすぶ会第5回訪中団のメンバーとしてである。メンバーは30代から60代までの女性4名、男性5名。初参加は、インターネット関係で参加した30代の女性2名と40代の男性1名である。

8月13日(月)、関空から中国東方航空で上海へ。今年は、日本軍が南京に侵攻した2つのコースを往路と復路でなぞってみようということだ。上海からすぐバスで蘇州に向けて出発した。往路は上海派遣軍が侵攻したコースだ。1937年8月13日に上海で日本海軍陸戦隊と中国軍が交戦している(「第二次上海事変」)が、今年から上海市ではこの8月13日午前10時にサイレンを流す行事を始めたという。夕食を終えてホテルでテレビをみていると、中国の番組で小泉首相の前倒し靖国神社参拝を放映していた。

翌8月14日(火)、早朝散歩をして新聞を買い求めると参拝のことが大きくとりあげられている。蘇州に日本軍が侵攻したのは37年11月19日。当初苦戦を強いられていた日本軍は上海の背後から攻撃するために11月5日第10軍を杭州湾に上陸させたことから攻勢に転じたのである。この第10軍の杭州コースは復路でたどることになっている。

蘇州市内での侵攻の様子は本多勝一『南京への道』に生々しく描かれている。有名な寒山寺は、実際に行ってみるとどういうことのないお寺だった。雲岩寺の方がお寺らしかった。昼食後、再び高速道路を南京に向う。これまでの旅では、上海からその日のうちに南京に向ったため暗くなつてから日本軍が入場式をした中山門を通過したが、今年は明るいうちに中山門を通過した。占領後に日本軍が日の丸を掲げた城壁で、松井石根の馬上の姿等でよく写真にでてくる門である。つづいて中華門もたずねた。何回見てもすごい迫力で、門というより城である。四重になつていて一番大きな門の上の広場(建物は日本軍が壊してしまった)ではサッカーができるほどの広場だ。この日は、大人たちが中国の凧を揚げて

いた。



中華門

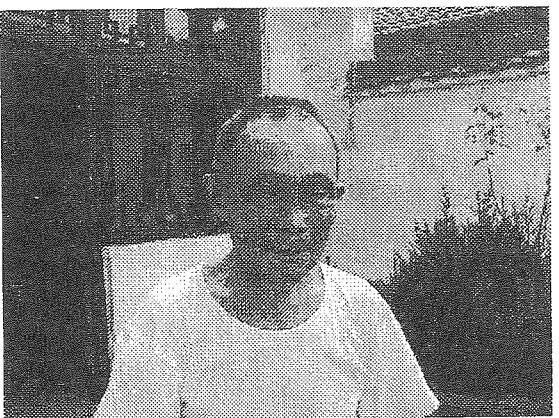
今年の南京でのホテルは「励志社」の敷地にある鐘山賓館。ここは元国民党政府の建物で南京大虐殺を指導した谷寿夫らBC級戦犯の裁判が開かれたところである。毎年ガイドをお願いする戴さんが私たちのために選んでくれたホテルである。

3日目、8月15日(水)は、朝から南京大虐殺記念館前での追悼集会に参加した。これまでの4回の猛暑の中での集会とうってかわってどしゃ降りとなった。中国側の挨拶の中では小泉首相の靖国神社参拝に抗議する南京市民の抗議の涙だという表現もあった。記念館参観のあと銘心会南京のメンバーと3万3千銘の遺体が集められた東郊叢葬地を訪ね掃除と簡単な追悼行事を行なった。この日は、フィールドワークでいざれも虐殺現場である燕子磯(有名な揚子江をのぞむ観光地もある)、草鞋峡、煤炭港、和記洋行、中山埠頭、そして当時ナチスの旗を掲げて南京市民を救ったドイツ人・ラーベ旧居を訪ねた。ラーベ邸は、昨年訪問した時はまだ南京大学の宿舎として利用されていたが、今回訪問した時は地下鉄工事の作業員の臨時宿舎として利用されていた。態度の戴さんに頼んでもらって中に入ることもできた。『ラーベの日記』にでてくる市民をかくまつた防空壕は今は道路となつている部分のようだ。

4日目の8月16日(木)、励志社跡のホテ

ルで朝食をすませてから、バスで杭州に向う。杭州湾に上陸した第10軍が南京に侵攻した道は現在の104号線にほぼ添っている。途中、すごい数の焼物の店が並んだ宜興では、おもしろいお土産を買ったりした。宜興を過ぎて太湖(琵琶湖の3倍!)を左(東)に見ながら杭州に向ったが、ほとんどの都市は第10軍が攻略・占領した都市だ。

杭州では最初に富陽市受降鎮を訪ねた。受降鎮は以前、長新郷とよばれていたが、45年9月4日、日本軍が中国軍との間で締結したこの地における降伏文書の署名が行なわれた所だ。その後「受降鎮」とよばれるようになつたが、記念館には文書に署名した机もそのまま残されていた。杭州には1937年22~24日ごろ日本軍が攻め込んだが、当時10歳だった張來有さん(74歳、おそらく数え年)のお話をうかがつた。村では200軒の家が焼き払われ1700軒のなかで371人が殺された。記念館内の写真を示して「あの木(現在はない)」に男性が縛りつけられて4~5人の日本兵による銃剣の的にされたが、その光景は張さんを含めて多くの人が目撃しているという。「詳しく話すと1日あっても足らない」ということだった。(写真下)



杭州で夜、水餃子を食べるため街でたら、公衆電話に小泉首相の靖国神社参拝に抗議するビルがはつてあった。学生がはつたのだろうか。餃子屋では、中国の若い人との交流になり、彼らが「北国の春」(中国で流行っているようだ)、私たちは「草原情歌」(一応中国語で)を歌つた。

8月17日(金)、午前中は西湖観光にでかけた。韓国からの観光客が多く、交流もする。

午後、杭州湾の日本軍上陸地点を目指してバスを走らせる。杭州湾といつても現在は上海市に編入されている金山衛というところだが、事前の調査では場所を特定できていない。聞きながらたどり着いたのは「金山衛城南門侵華日軍登陸處」でその碑文には「1937年8月13日淞滬事変(第二次上海事変)が勃発して11月5日(農暦10月初3日)日本軍が大挙南門外に上陸した。守っていた100余人が奮起反撃したが壮烈な犠牲となった。日本軍が金山衛城を侵略占領後、住民1,015人が殺され、3,059世帯が焼き払われ壊された」とあった。1985年9月3日に上海市金山県人民政府が建てたものだ。その近くには他にも「十月初三惨案紀事碑」などがある。本多勝一の『南京への道』で、上陸地点として紹介されている石碑は、このなかのひとつようだ。私たちは更に本当の上陸地点を探した。ガイド氏は、オートバイスタイルのタクシー(分かりますか?)に乗って私たちのバスを先導してくれた。そして海岸線の記念碑に行き着いた。そのコンクリートの石碑は劣化してまともに読めない状態であったが、上陸時の写真などをながめながら、ここが上陸地点であろうと納得した。海岸で海草をとっていた老婦人に話を聞くと、確かにここから上陸してきたという話だった。

夜かなり遅くに上海に着いて、夕食後にバンド(外灘)を散策した。夜景の中にひとときわ派手な日本企業の広告が、バンドの夜景を台無しにしていた。

6日目の8月18日(土)、飛行機のリコンファームのミスから私たちはビジネスクラスに乗って無事閑空にもどってきた。5回目となつた神戸・南京をむすぶ会の南京ツアーだが、今年も新しい発見のあつた旅であった。往路・復路と日本軍侵攻の道をたどるツアーは参加者に「南京大虐殺」をよりリアルに理解させるものとなつた。東京から参加の小学校教師湯本さん製作のビデオ(16分)は、南京市民にも果敢にインタビューを試みた秀作である。是非、ご覧いただきたいと思う。来年の8月には、南京・重慶を訪問する企画を考えている。みなさんも参加してみませんか。